

博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

第 9 号

平成 25 年 11 月

神田外語大学

はしがき

本号は学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条による公表を目的として、平成 25 年 9 月 15 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目 次

1. 山方 純子 博士 (言語学)

学位論文題目

第二言語読解における語彙推測—語彙知識、母語背景、及び、テキストのトピックへの馴染み深さが及ぼす影響—

・・・・・・・・・・ 3

氏名（本籍） 山方 純子 （福岡県）

学位の種類 博 士 （言語学）

学位記番号 甲第9号

学位授与日 平成25年9月15日

学位授与の要件 大学院学則第14条2項

学位論文題目

第二言語読解における語彙推測－語彙知識、母語背景、及び、テキストのトピックへの馴染み深さが及ぼす影響－

学位論文審査委員 主査 神田外語大学大学院 教授 堀場裕紀江

副査 神田外語大学大学院 教授 岩本遠億

副査 神田外語大学大学院 教授 田中真紀子

副査 台湾・開南大學応用日語系 教授 長友和彦

論文内容の要旨

本博士論文は、第二言語（L2）読解における語彙推測のメカニズムを解明することを目的として行った実証研究の結果を報告したものである。本研究では、L2としての日本語の読解における語彙推測に、語彙知識、母語背景、および、テキストのトピックへの馴染み深さが及ぼす影響を調べるために、言語テスト（語彙知識テスト・読解テスト・語彙推測テスト）と回想報告テストを用いて、日本語学習者および日本語母語話者を対象に実験調査を行い、収集したデータの分析結果をもとに考察を行った。

関連先行研究としては、読解における語彙推測の位置づけに関する研究、L2語彙推測に使用される手がかりに関する研究、L2語彙推測に関わる読み手要因（語彙知識・トピックへの馴染み深さ・母語背景）に関する研究、L2日本語読解における語彙推測に関する研究がある。これらの先行研究を取り上げ、その成果と問題点を整理し、未解決部分を指摘した。

先行研究の把握に基づき、本研究課題として以下の4つの質問を提示した。

（1）読解における語彙推測能力は、語彙知識の深さ、推測対象語を含むテキスト内の低頻度語の知識、および、母語背景の影響を受けるか。また、その影響は、テキストのトピックへの馴染み深さの程度によって異なるか。

（2）語彙推測で使用された知識源の数と種類は、語彙知識の深さ、推測対象語を含むテキスト内の低頻度語の知識、および、母語背景の影響を受けるか。また、その影響は、テキストのトピックへの馴染み深さの程度によって異なるか。

（3）語彙推測で使用された知識源が成功に至る確率は、語彙知識の深さ、推測対象語を含むテキスト内の低頻度語の知識、および、母語背景の影響を受けるか。また、その影響は、テキストのトピックへの馴染み深さの程度によって異なるか。

（4）語彙推測能力、語彙推測で使用された知識源の数と種類、その知識源が成功に至る確率は、テキストのトピックへの馴染み深さの程度によって異なるか。その違いは、母語背景によって異なるか。

本調査では次のような研究方法を用いた。調査協力者は、中・上級レベルの日本語学習者55名（韓国語母語話者40名・中国語母語話者15名）および日本語母語話者20名である。調査協力者は短いテキストを読みながらテキスト中の空欄に文脈や内容から考えて適切だと思われる語を補充するというタスクを行った（「語彙推測テスト」）。次に、テキストを見ないでその内容を母語で筆記再生した（「テキスト内容理解テスト」）。その後、自分自

身が既に行った語彙推測テストを見ながら、語彙推測でなぜそう考えたか、何を手がかりにしたかを口頭で報告した（「語彙推測についての回想報告テスト」）。使用したテキストは800字程度の長さの説明文4編で、トピックの馴染み深さの高低それぞれ2編である。各調査協力者はトピック馴染み深さの高低それぞれ1編ずつ読んだ。トピックの馴染み深さ高低は、12種類のトピックについて馴染み深さの順位づけを行うというテストを調査協力者に課し、その結果をもとに判定した。また、日本語学習者に対しては語彙知識を測定するために、2種類の語彙テストを課した。語彙知識の広さの測定は、テキスト内の低頻度語の既知語率を調べた（「テキスト内低頻度語テスト」）。語彙知識の深さの測定は、4レベルの頻度の内容語72個を対象語として意味的関連（paradigmatic・syntagmatic）のある語を3つずつ選択するテストを用いた（「語連想テスト」）。

語彙推測能力は、語彙推測テストによる正答率を、テキスト内容理解は、読後の再生テストによるイベント再生率を指標とした。語彙知識はそれぞれの語彙テストの正答率を使用した。語彙推測についての回想報告データは、文字化し、どのような知識源を使って語彙推測を行ったかについて、テキスト内情報として文レベル（文中情報・統語分析・共起連語関係）、談話レベル（先行情報・後続情報・文脈全体）、テキスト外情報として言語知識、世界知識（トピック知識・その他）、計4つのカテゴリーに分類し、語彙推測における知識源の使用数、および、知識源の成功率を算出した。

本調査で収集したデータを統計分析し、以下のような結果を得た。

(1) 語彙推測能力には、トピックへの馴染み深さの程度に関わらず、「語彙知識の深さ」が影響を及ぼす。

(2) 語彙推測における知識源の使用数には、「母語背景」（馴染み深いトピックで知識源全体と文レベル）と「低頻度語の知識」（馴染みの薄いトピックで知識源全体）が影響を及ぼす。

(3) 語彙推測における知識源の成功率には、「語彙知識の深さ」（馴染み深いトピックで知識源全体と文レベル）と「低頻度語の知識」（馴染み深いトピックで世界知識）が影響を及ぼす。

(4) テキストのトピックへの馴染み深さは、語彙推測能力、知識源の使用数と成功率のそれぞれに関与する。馴染みの薄いトピックより馴染み深いトピックの方が統計的に有意に勝っていたのは、L2学習者については、韓国語話者群は知識源全体の成功率、中国語話者群は知識源全体と文レベルの使用数であった。一方、日本語母語者群については、語彙推測能力、知識源全体・文レベル・世界知識の使用数、および、談話レベルの成功率であった。

本研究の結果から、L2 学習者のテキスト理解における語彙推測は、語彙知識の広さ・深さの両側面、母語背景、トピックの馴染み深さのそれぞれによって影響されることが明らかにされた。特に、語彙知識の深さと広さは異なる形で語彙推測に関与することが明らかにされた。語彙知識の深さは、トピックへの馴染み深さの程度に関わらず、L2 読解における語彙推測において重要な役割を担っているが、語彙知識の広さ（特に低頻度語に関する知識）は馴染みの薄いトピックのテキストの場合により重要となる。また、テキストのトピックの馴染み深さの語彙推測への関与は、母語背景によって違いが見られた。トピックの馴染み深さの効果が最も顕著にみられたのは日本語母語話者であったことから、馴染み深いトピックであることが語彙推測にプラスに作用するためには、ある程度の言語習熟度の高さが必要であると考えられる。さらに、母語背景に関わらず、語彙推測はテキスト内情報に基づくボトムアップ処理中心に進められるが、言語能力の向上と共に、談話レベルや世界知識などの使用が増え、トップダウン処理が増していく様子が見え、複数のレベルの言語処理に関わる複雑な言語活動であることが確認された。

最後に、本研究結果に基づく教育的示唆として、語彙と読解それぞれの指導を関連づけ、語彙知識の質的側面の増強、語彙推測の指導方法や教材・カリキュラムの開発などについて述べた。

審査結果の要旨

山方氏の博士論文は、第二言語（L2）読解における語彙推測のメカニズムを解明することを目的として行った実証研究の結果を報告したものである。これまでの応用言語学・第二言語習得研究分野の先行研究における研究成果をもとに、新たな視点を加えてさらに発展させた形で、L2日本語学習者を対象に実験調査を行い、読解における語彙推測に語彙知識、母語背景、および、テキストのトピックへの馴染み深さがどのような影響を及ぼすかを分析し考察し、「第二言語（L2）読解における語彙推測」についての新たな知見を提供する完成度の高い博士論文である。

先行研究の把握については、読解における語彙推測の位置づけに関する研究、L2語彙推測に使用される手がかりに関する研究、L2語彙推測に関わる読み手要因（語彙知識・トピックへの馴染み深さ・母語背景）に関する研究、L2日本語読解における語彙推測に関する研究と、応用言語学・言語教育研究・L2習得研究分野の先行研究・文献を広く読み、L2読解・L2語彙推測に関する先行研究のアプローチ方法や内容・方法における推移と問題点、および、未解決部分を明らかにし、よく整理している。

研究方法については、綿密かつ慎重な研究計画のもとに妥当性のあるデータを収集し適切な分析を行っているとは判断される。読み材料の選定、対象語の選定と判断、諸テスト（読解テスト・語彙推測テスト・語彙テスト・回想報告テスト）の選定、テストデータの分析方法の選定と判断などが先行研究からの知見を活かした枠組みを用いて行われており、語彙知識の広さ・深さ両面の測定、トピック馴染み度条件ごとの複数テキストの使用、語彙推測能力に加えてテキスト内容理解の測定、語彙推測回想報告データをもとにした知識源の使用数・成功率の両面からの分析など、的確、丁寧かつ正確さを期して研究が行われたことが伺われ、研究における信頼性が高い。

また、収集したデータを適切な統計手法を駆使して、多角的かつ多重的に分析しており、この点でもデータを徹底的に分析するという姿勢が見られる。複雑な統計処理分析の結果は分かりやすく提示され記述されている。

結果の考察は、語彙推測能力に影響する複雑かつ多岐にわたる諸要因を整理して、予め設定した研究課題(質問)1つ1つに答えるべく、丁寧かつ慎重な分析と解釈を行っており、本研究の結果と先行研究の結果との比較についても適切な議論を行っている。また、結論、および、今後の研究への課題と教育的示唆も妥当である。

全体的に説得力、一貫性のある論文としてまとめており、その力量は見事である。特に、「語彙知識」や「母語背景」の「語彙推測」への影響を、「トピックへの馴染み深さ」の違いによって切り込み、徹底的に分析していく方法は、本研究の卓立した特色であり、その

結果が新たな知見に結びついている。

本研究の意義として特に以下の点が挙げられる。

(1) 従来のL2語彙推測研究の多くが読み手のL2習熟度や読解力の影響を調べたものが多い中、本研究は語彙知識の多面性(広さ・深さ)が語彙推測にどのように影響するかについて、読解における語彙推測のメカニズムを様々な知識源(文レベル:文中情報・統語分析・共起連語関係、談話レベル:先行情報・後続情報・文脈全体、言語知識、世界知識:トピック知識・その他)の使用と成功率を分析することによって明らかにしており、その貢献度は非常に大きい。

(2) L2語彙推測に関する実証研究は極めて少ないが、本研究は単一研究の中でL2語彙推測に関わる読み手要因として「語彙知識(広さ・深さ)」「テキストのトピックへの馴染み深さ」「母語背景」の3つに焦点をあて、それらの関わりをテストデータをもとに徹底的に分析していく方法を用いて、これまでにない新たな、より信頼できる知見を見出している。

(3) 従来のL2語彙推測についての研究は、その多くが英語学習者を対象としたもので、日本語学習者を対象とした研究は、課題が困難なものであることもあり、ほとんど行われていない。それを、日本で留学生全体の76%を占める中国語・韓国語を母語とする日本語学習者を対象に、実証的に取り組んだという点も意義が大きい。

(4) L2学習者の語彙知識と母語背景がL2語彙推測(語義推測)の結果とプロセスのそれぞれにどう関わるかを分析し考察している点は、L2読解研究分野で最近注目されている、読解中の言語処理とトピック知識へのアクセス(概念処理)の関係についての研究にも繋がるもので、応用言語学・L2習得研究分野の研究領域間の協働の重要性を示唆すると捉えることができる。そういう点でも本研究の意義は大きい。

以上のことから、山方氏の博士論文は、L2読解における語彙推測のメカニズムを調べるために非常に質の高い実証研究を行い、これまでの研究成果をさらに発展させ新たな知見を提供しており、その点で国内外の日本語教育分野においてだけでなく、広く応用言語学・第二言語習得研究分野における知識の向上に貢献できると言える。よって、合格と判断した。

博士學位論文

内容の要旨
および
審査結果の要旨

第 9 号
平成 25 年 11 月

発 行 神田外語大学大学院
〒261 - 0014 千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1
Tel. 043-273-1320
Fax 043-273-1197